

第3回舞鶴市廃棄物減量等推進審議会

議事録

市民文化環境部環境対策室
生活環境課

<開催日時>

平成29年2月23日(木) 午後1時30分～午後3時30分

<開催場所>

市役所別館大会議室

<議題>

- (1) 舞鶴市のごみ収集やごみステーションに関する市民意識調査の結果について
- (2) 自治会長を対象とした「ごみ収集に係るアンケート結果」について
- (3) ごみ収集に係る他市の取り組み事例について

午後 1 時 30 分 開会

- 田中主幹 只今から第 3 回舞鶴市廃棄物減量等推進審議会を開会いたします。会議を始めるにあたって、事務局から報告をさせていただきます。本日の会議は、山川会長と森委員が都合により欠席されております。出席委員は 10 名で、出席委員は過半数を超えておりますことを報告させていただきます。
- また、本日の議題の中には、非公開情報が含まれておりませんので、公開会議であることをご了承いただきたいと思います。
- 事務局からの報告は以上となります。それでは、本日、山川会長が欠席されておりますので、会議の進行は、副会長の青山委員にお願いします。
- 青山副会長 それでは、改めまして只今から平成 28 年度第 3 回舞鶴市廃棄物減量等推進審議会を開会します。
- 前は、全員の方ではございませんでしたが実際に現場を見ていただいて、認識を新たにしていただけただけの部分もあったかと思いますが、本日もまた色々と舞鶴市のことに関してご意見を賜りたいと思いますので、よろしくお願いします。
- それでは、本日の議題に入りたいと思います。議題 1「舞鶴市のごみ収集やごみステーションに関する市民意識調査の結果」について、事務局から説明をお願いします。
- 平野室長 平成 27 年度から市民サービスとしての廃棄物施策について検討するため、京都府立大学に舞鶴市に適した廃棄物施策のあり方についての研究をお願いしております。
- 平成 27 年度については、地域へのヒアリングや収集現場の見学、アンケート調査を実施し、舞鶴市の廃棄物施策の特徴などを把握していただき、報告書としてまとめていただきましたので、府立大学から報告をしていただきます。
- 今回の研究報告の中から見える本市のごみ収集体制等の特徴や課題、また、市民意識などを共有認識していただければと考えております。
- それでは、発表を京都府立大学公共政策学部の勝山准教授にお願いします。どうぞよろしくお願いいたします。
- 勝山准教授 それでは、私のほうから今回のアンケートの結果について報告をさせていただきます。事前に皆さんのお手元に報告書をお配りさせていただいておりますので、一通りお目通しいただいているものと思いま

す。私のほうからはこの報告書のポイントの部分だけご報告させていただき、報告書以降は私自身が調査分析しましたところをご説明させていただきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

まず、この報告書のサマリーに書かせていただいているポイントが4つありまして、一つ目が「高齢者問題」、二つ目が「立ち番の問題」、三つ目が「リサイクルプラザへの持ち込み問題」、四つ目が「自治会の非加入者に関するまとめ」ということで、報告書の3ページ～9ページにかけて書いてあることの抜粋となっておりますので、画面のほうを見ながらご説明させていただきます。

まず、高齢者への配慮ということで、80歳以上の方の結果をみると、「ごみ出しで歩くのがつらい」や「古紙類が重たい」がそれぞれ約30%ということで、非常に高齢者にとってはここの負担が大きいというのが結果として出ております。二つ目として挙げさせていただきたいのが、古紙の出し方ということで、高齢者だけの世帯に限れば65%が不燃ごみの収集日を利用していることが分かります。それと併せて町内会やPTAなどの集団回収も4割の方が利用されているということで、高齢者の方にとっては不燃ごみの収集日や集団回収を中心に利用していることが見受けられます。そして、これは高齢者に限らないケースであります。30代～70代の年齢層に共通していることですが「不燃ごみの立ち番がいや」、「不燃ごみの収集回数が少ない」という意見に関しては30～40%と非常に高くなっておりますので、ここが審議会でご意見をいただくポイントになるのかなと思っております。

続きまして、高齢者への配慮ということで、ごみ出しが困難な世帯への支援方法としまして一番高い割合だったのが、「行政支援（一部自己負担）」の25%でした。ただ、もう一方の地域の方々に支援すべきという「地域支援」というのも23%となっております。三番目が「行政負担（租税負担）」ということで税金の中から負担分を補うのがよいと思われている方が15%という結果でした。ひとつめの自己負担する場合であれば、100円か200円程度ということが一つ方向性として出てきたということでございます。

続きまして、二つ目の問題であります立ち番の負担感ですが、第一回の新聞記事にも出ておりましたが、ここが皆さん非常に負担に感じておられるところであろうと思えます。アンケートの結果から、約60%の人が負担に感じられており、その中でも特に負担に感じる人は約14%、やや負担に感じる人が42%と大半の方が立ち番を負担に感じていながらやっておられるという状況でございます。

それから、立ち番制度の継続性については、10年後もこのまま続けられるのは難しいと考える方が47%と約半分くらいの方がこのまま続けていくのは難しいだろうという回答でした。一方では、

17%の方が続けられると思っておられる中、舞鶴市では今後どうしていくかということをご議論していただく必要があるかと思っております。

立ち番制度について、「かなり負担に感じる」を選択した71%の方、また「やや負担に感じる」を選択した57%の方が、このまま続けるのは難しいを選択されているということを考えますと、やはり負担に感じておられる大半の方がこのまま続けるのは難しいと考えておられるということがこの調査結果から浮かび上がってきました。

続いて、今後の立ち番をどうすべきかということですが、「自治会実施」が37%、次に「分からない」が16%、「事業者等に委託すべき」が13%、「不要」が12%、「行政がすべき」が9%という上位の回答結果になっております。

三つ目のリサイクルプラザへの不燃ごみの持ち込みにつきましては、「主にリサイクルプラザに持ち込む人」が13%、ときどき持ち込む人が30%という状況となっており、半分くらいの方がリサイクルプラザを利用されているという理解ができるかと思えます。ただ、地域別にみた場合、リサイクルプラザの利用率にはバラつきがありましたので、今回の結果から地域の特徴が示せられたものはございませんでした。

一方で、自治会への非加入者を見た場合、主にリサイクルプラザを利用する方が約30%、若年者ほど多いということで20～30歳代の方で30%が利用されているという結果から、自治会非加入者の若者は比較的リサイクルプラザを利用しているというふうにご理解いただければと思います。それから、スーパー等での店舗で古紙回収をしている場合の利用率は、30歳代で約50%の方が利用されているということで、世代によって利用率が変わってきております。

四つ目の自治会非加入者についてですが、舞鶴市の自治会加入率が各小学校区で92%以上ということなので、自治会加入率が減ってきている中においても、舞鶴市は比較的地域のコミュニティそのものが、まだしっかり根付いていると言えるのではないかと思います。非加入者の世帯については、40歳代以下の1人暮らしの人が相対的に多いという傾向があります。それから集積所や集団回収の利用率が低くて古紙ボックスの利用率が高いという傾向が見えるということは、やはり自治会非加入ということで集積所を使うということに負い目を感じるということで、他の形での出し方になっているということでございます。

ごみの出し方に対するシステムについては、集積所を自治会で管理すべきと思う人は、自治会加入者は66%がそうすべきだと思っているが、非加入者は27%ということで、加入・非加入で意識の違いが出て

いることが分かります。ただし、ここの回答については「分からない」や「その他」という回答も多くあり、ごみの収集の仕方そのものについて、みなさんも迷っておられるところではないのかなと思われる部分です。

以上が報告書に基づいたものであり、私の前任者が取りまとめたものとなっております。

これからご紹介させていただく部分については、私を取りまとめた部分となっております。まずこのアンケート調査には自由記述欄がいくつかありますので、その中から浮かび上がった状況をご報告させていただきます。

まず、自由記述欄から浮かび上がってきた課題としましては、一つ目は「収集回数が少ない」、「集積所までの距離が遠い」、「ごみが重い」など、先ほどの高齢者の方もそうですが、高齢者や障害者の方への負担というものが懸念されております。それから、10年後このまま続けられないというような将来の不安ということも感じておられます。また、自分が高齢者ということで家族に負担をかけてしまうという懸念をされている世帯もあったということで、やはりごみの回収そのものをどう考えていくのかという場合に、高齢者や障害者への配慮を引き続き考えていく必要があるだろうと思っております。

それから、三つ目の立ち番への負担については、60%の方が負担と感じている中で具体的に記入いただいているのが、働き盛りの世帯の方では就業前の時間であるため遅刻して仕事に行かなければならない、時間休をとって休まないといけないという負担が大きいところがあります。冬場の体調の悪化やルールを徹底していくときに人づきあいが難しくなっていることに対しても負担感を感じておられることがありました。

それから四つ目ですが、リサイクルプラザへの持ち込みですが、平日のみの持ち込みなので、出来れば休日にも対応してほしいという思いや、リサイクルプラザを利用する場合はどうしても車の使用が前提になってくるので、そこに対する懸念があるということが読み取れました。最後になりますが、分別の必要性そのものに疑問を感じておられる方がいるということがこの自由記入欄の中から浮かびあがりました。分別ルールの複雑さや回収後の処理方法、回収費用の不明確さなどに対する不信感を持っておられる方がいるということを考えますと、少なくともそれらに対する対策が必要だろうといえます。

単に不満だけではなく、こうしたほうが良いのではというアイデアも記入いただいておりますのでご紹介させていただきます。主な意見としては、未加入者に対するルールの徹底が必要ではないかという意見や回収品目毎に曜日を変えれば良いのではないかという意見、分別

収集による処理費用の軽減状況をできるだけ周知してほしいなどです。また、高齢者に対するごみ出しの支援が必要ではないか、自宅前での戸別収集を導入すべきではないかといったご意見もありましたし、リサイクルプラザへの持ち込みの有料化を検討すべきではないかといった内容もありました。住民の方自身もごみに対する関心が高いといったこともあり、このようなアイデアが出てきたということでございます。

私なりに、この自由記入欄とアンケート調査の結果をもう一度考え直してみたところ、その中で一番大きな課題は「立ち番」の問題であると考えました。立ち番制度は、6種9分別収集を開始した平成10年から始まったということで、18年間経っているということもあり制度そのものに負担を感じておられる人が約60%、このまま続けていくということが難しいという人が47%、30～70歳代の立ち番そのものが嫌だと思っておられるという状況からすると、今回見直しをする一つのきっかけになるものだと考えております。

それから、もうひとつ考えていかなければならないのが、立ち番を自治会で実施すべきという割合が高かったのですが、その一方で、「分からない」「不要」という人たちがそれぞれ16%、12%あるということを考えますと、立ち番そのものをどうしていくべきなのかということも考えていく必要があるだろうということで、それも踏まえて調査分析をさせていただいたというところでございます。

それを踏まえて、舞鶴市の小学校区毎に人口の分析をさせていただきました。横軸の数字ですが、2000年～2010年は国勢調査に基づく人口であり、2015年～2025年は厚生労働省の推計人口を利用させていただき、舞鶴市の65歳以上の高齢者人口がどういう風になるかを分析させていただきました。

このデータに基づいてみると2000年には高齢化率が37%ぐらいの岡田地域は2025年には50%を超える伸びを示していたり、一方で高齢化率が最低である中舞鶴地域は24.9%であったりと、高齢化率が半分ぐらいの開きがある地域もあるので、地域によって高齢者率が異なっているため一律に判断することができず、各地域の状況を踏まえて分析していく必要があると考えられます。

また、65歳以上の高齢化率のほかに、ごみ出し等がかなり体に負担を感じるだろうという年齢である85歳以上の後期高齢者率も分析したところ、岡田地区と池内地区は31%を超える後期高齢者率でした。こういう状況を考えれば今から高齢者に対する支援の仕方を考えていく時期にきているのではないかと考えられます。

もうひとつ気になる点は、立ち番に負担を感じるという傾向をみたときに、高い割合を示している割には自治会でやるべきだという意見

が挙がっていることなのですが、その点については、次の資料で分析させていただきました。縦軸が立ち番を負担に感じる割合、横軸が2010年時国勢調査時の高齢化率の分布を表しています。表の中の斜線は、各地域の状況を分析していくと、どういう傾向があるのかということを示しております。

表の左側の地域については、高齢化率は20～25%程度の地域ですが、非常に立ち番を負担に感じておられる地域となり、一方で表の右側は、高齢化率は高いが左側の地域よりは負担感をそれほど感じておられないという地域になります。岡田地域や由良川地域、福井地域などは比較的負担感が少ないということで、高齢化率が高くなるとともに立ち番の負担感が増えるということではないことが、この表から読み取れます。

ただ、次の資料では10年後に立ち番を続けていくのが難しいかどうかを調べた結果なのですが、先ほどのグラフとは真逆の方向を示していることが分かります。この結果を考えますと、将来的には立ち番の継続性と高齢化は結びついていることがここから分析できます。

この分析結果から考察しますと、立ち番の廃止と高齢化への対応について検討する必要があるだろうというのが、このアンケート調査の結果から導き出された答えではないかというふうに思っております。

以上で、今回のアンケート調査結果の報告を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○青山副会長 ありがとうございました。今ご覧いただきましたように立ち番の問題、高齢者の方々がごみを出す問題と色々複層しているという状況がございます。最後から2枚目のスライドについては、どうも若い人が多いところの地域では、若い人が面倒くさがり屋なのかそういうことをやりたくないという意識が高いというのか分かりませんが、立ち番というものが敬遠されている感じがして、もう少し違う方向性があるのではないかというような意見が結構強く出ておりました。最後のスライドは、これからどんどん高齢化していった場合に、今後どうなるかというあたりを分析した結果でございました。

せっかくの機会でございますので、このアンケートの内容等について、感想でも質問でも結構ですのでいただければありがたいと思います。

○内海委員 私が住んでいるところは岡田地区ですが、分析のとおり高齢化率は高いけれど立ち番については皆さん頑張っておられます。なぜそうなのかということを考えてみますと、皆さんお互いにお世話になっているという思いがあり、お世話になった分については、歳をとっても元

気に動けるうちは義務を果たしていきたいという意識がものすごく高いのだと思います。そのため、少々高齢になったとしても不燃ごみの当番に関しては務めさせていただきますという方が多いからこういう結果になっているのだと思っています。やはり、街の人は義務感といますか、そういう意識が低いのだと思うのですが、これは強制するわけにもいきませんので、難しいところかと思えます。

私どもの地区では、80歳を過ぎると立ち番が免除されるのですが、元気で体が動く間はやらせていただきますというような意識の高い方も多く、そういうところが私どもの地域の特徴であると思えます。

○青山副会長 ありがとうございました。岡田地区で例えばこれから10年、15年と経った時に、立ち番をどうしようかといった議論はありますか。

○内海委員 やらなければといった思いはあるのですが、体がついていくかどうかという問題があります。やはり困難になるのではとは予想されます。私も10年経てば80歳を超えますので、できるかどうかは分かりませんが、できる間はやらなければという意識は持っております。

○青山副会長 岡田地区は模範的な地域のような感じがいたします。岡田地区のような意識を持った市民が市全域に広がればそれに越したことは無いのですが、時代の流れもございまして色々な方々が住むようになってきて様々な意見はあると思えます。他に何かご意見等はございますか。

○西山委員 立ち番制度は平成10年から始まったということですが、それ以前はどうしていたのですか。

○橋本所長 平成10年より前は今の6種9分別ではなく3分別でゴミを出しており、集積所についても、今の数よりも少なかったと思えます。

○品田副会長 平成10年当時は、ゴミの中にはまだまだ資源になるものが含まれているため、資源化出来るごみは資源物として分別することでゴミの量を減らしましょうというような趣旨説明や制度説明を市職員が各町内を回って説明をされておられました。そして、各町内が制度の趣旨を理解し、自治会区長会のほうでしっかり分別を進めていこうということで今の立ち番が始まったと理解しております。

しかし、近年は市からそういった趣旨や制度の説明が各町内にないので、ゴミに関しての意識が薄れているのではないのかなと思えます。

○橋本所長 経過を説明しますと、平成7年に容器包装リサイクル法が施行されたことにより、それ以降、舞鶴市では資源化に特化していこうということでリサイクルプラザを建設し、6種9分別という排出方法で市民の皆様をお願いをしていこうということになりました。平成8年以降にモデル地区を作って、それと並行して全自治会に対して説明会を実施していったという経過でございます。確かに当時からすれば薄れている感じはありますが、市としましては継続的にごみに関する啓発をしてまいりたいと考えております。

先ほどのデータの中にもありましたが、若い人は説明会に来ておられない方が多いのではないかと思います。ごみの出し方について知らない方がおられるかもしれませんので、そういった方に対してどうやって周知をしていくかということが課題であると思っております。

○青山副会長 その当時は、3分別のステーションに勝手に置いて帰るといようなイメージですか。

○橋本所長 私もその当時ごみ処理業務を担当しておりませんでしたので、正確には申し上げられませんが、たくさんの自治会の方がおられますので、3分別の種類ごとに置き場所を決めていただいて出していただいて、出されたごみを回収していたと思います。

○青山副会長 その頃は今のよう綺麗に分別がされていなかったと思われませんが、収集の際に現場でさらに細かく分別するというようなことはあったのですか。

○橋本所長 無かったと思います。基本的にその当方で資源化できたのは鉄とガラスだけでしたので、それ以外はすべて埋め立てごみという扱いであったと思います。

○青山副会長 ありがとうございます。ごみも時代とともに色々なものが出てきております。特にプラスチックやペットボトルのようなものは増えましたが、それ以外にも今までは捨てていたけれども、有用に使えるというものも出てきておりますので、そういったところから現在の6種9分別になったのだと思います。

それでは、アンケート調査の結果について感想でもなんでも結構です。委員の皆さん一言ずつお願いします。

○田中委員 ごみ出しに関しては、今は体が動くのでリサイクルプラザへ持って行ったほうが早くて便利です。自分の都合に合わせられるというこ

とと、プラザに持って行くと物凄く手際が良く処理してもらえるので、プラザへ持ち込むほうを選択している状況です。

○青山副会長 それは一理あるかもしれませんがね。谷口委員いかかでしょうか。

○谷口委員 私自身は不燃ごみの立ち番が回ってくるのが 11 カ月に 1 回だけなので、それが冬に当たったら嫌だなという程度なものと、親がリサイクルプラザへ直接持ち込みをする際に一緒にごみを持って行ってもらうので、ごみ出しの大変な状況をあまり知らないのですが、ただ、同世代の方の話を伺うと、旦那さんが仕事でいない状況などでお母さんが子供をおんぶしながら立ち番をしている状況などもあるので、排出困難者というのが高齢者に絞ってデータを取っておられますが、色々な事情で大変な世代というのがどこにでもあるのではないのかなと思います。

このアンケート調査では、立ち番の負担がすごく大変だと言える高齢者の方が回答されていますが、介護が必要なご家庭においてはどのように排出されているのかが、このアンケート調査や報告では見えてきません。そのため、実際に介護保険を使っておられるご家庭では、どのような形でごみの排出をされておられるのかということが新たな疑問として湧いてきました。地域の支えの中で排出されているのか生活支援の中でホームヘルパーなどが入っていて然るべきところまでサポートしているのかなど、ごみと介護はどのような形で区別されているのかなど新たな知りたい疑問が出てきました。

○青山副会長 ありがとうございます。今の関連については、今回の集計結果には入っていませんが、前のアンケート結果のときにはありませんでしたか。

○平野室長 自治会長へのアンケート結果の中では、「ごみの排出や分別が困難な世帯は、どのようにして排出されていますか」という問いがありまして、その中では親類の方が出しているが 13%、隣近所が 28%、ヘルパーが 6%といった回答を得ています。

ただし、これは自治会長さんが把握しておられる結果です。分からないが 35%と、未回答と合わせると半分以上となりますが、とりあえずこういう結果となっております。

○谷口委員 自治会長さんの任期は一年任期が多いじゃないですか。どちらからというと民生委員さんのほうがより実地を把握しておられるのではないかと思うのですが。

- 平野室長 そうですね。ですから、逆にいえば自治会長さんだから分からない部分が多く、これを民生委員さんにお尋ねすれば分からない部分がもっと減ったのかも知れません。
- 青山副会長 ありがとうございます。それでは西山委員はいかがでしょう。
- 西山委員 私の町内では役員になれば年に2回立ち番がありますが、役員の世代的にも高齢の方や顔見知りの方は分かりますので、持ってこられると手伝ったりする町内です。
しかし、最近は若い方も役員になっておられることもあります、立ち番の途中で男性から女性に変わられたりしてそれなりに対応されておられるようです。私自身は立ち番を負担には感じませんでしたし、まだ、自治会加入率が比較的高い地域ですので、今のままやっていくのがいいのかなとは感じております。
- 青山副会長 ありがとうございます。立ち番を今の形でやるのかあるいは立ち番をどうするのかという議論については、後日議論するテーマになると思います。本日はアンケート調査の結果等からこういった実態で出たという事実を皆さんに認識していただいて、自分の感覚と違うなど感想などをお聞かせいただくと今後の判断の上で役に立つものと思います。
- 西山委員 アンケート結果の感想としては、立ち番が嫌だという回答が多いのが意外でした。
- 青山副会長 ありがとうございます。それでは藤原委員お願いします。
- 藤原委員 私は福知山市民ですので感想しか言えませんが、福知山市ではごみステーションの日に出すだけで「立ち番」というシステムはありません。
ただ、きちんと分別がされていないといつまでもごみが残ってしまいます。それは結局、組長さんとか気がついた人が手をかけていただいているのだとは思いますが、どちらがいいのかなと思いました。
また、最後の二つのグラフですが、このグラフの意味しているところは、ごみだけの話ではなくて社会において高齢者の方はきちんとされているし、若い方は面倒くさかったり、やりたくなかったりなど自己中心的なところが見受けられますので、このとおりの結果になるのかなと思いました。

○青山副会長 ありがとうございます。前半の点については後で先進的な事例の調査に勝山が行っておりますので、それについてご報告をさせていただいて、また認識を新たにさせていただければありがたいなと思います。それでは木谷さんよろしくお願ひします。

○木谷委員 私も一昨年まで数年間自治会長をしておりまして、立ち番問題については町内の中でもかなり大きな問題でした。一応立ち番をすると報酬としてお金が支払われておりましたので、比較的立ち番をしていただけなのですが、できる人が繰り返し立ち番をすると、同じ人が報酬をもらい続けてしまうことになり、それはそれで問題になりました。みんなで立ち番をしようと話し合いをすると大変だからできないと言い出す人がいるし、できる人が何回もすれば同じ人がお金ばかりもらってといった声が出たりと、毎回そこは議題になっています。一応、町内の立ち番については、当番制になっていて無理な人は立たないでほかの人に回すという仕組みになっています。

私のところは公営団地で比較的大きな世帯数なのですが、だいたい立ち番がいなくなっからごみを出される人が多いように思います。顔を合わしたりする人が嫌な人が多いので、立ち番がいなくなっからごみの量が増えるなというのが率直な感想です。たぶんそんなに分別ができていないのではないかなと想像するのですが、年配の方は缶に穴をあけなさいとかしっかりと行ってくださるので、そういったことを言われるのが嫌なのかなと思います。町内に関してそういったことが大きな問題となっているのかなと思います。

また、仕事関係で福祉の現場に立っておりますのでその観点から申し上げますと、四月から介護保険制度が変わりますが、ごみを出すだけでヘルパーを入れるということについても、色々問題があるのですが特にヘルパーの業務が朝に集中するということが挙げられます。今、モデル地区でやっているところは、500円のワンコイン制で地域の方やシルバーの方にごみを出してもらおうという仕組みがありますが、やはり基本的に分別ができずにごみが出せないということが大きな問題となっております。町内の集積所に出しにいったら分別ができてないということで出せなくなっしまい、それがだんだん家の中に溜まり、ごみ屋敷化しているといった問題が福祉業界の中でも大きな問題となっております。

実際に家の中に入ったら、ごみがたくさんあり、そもそも分別ができていない状況やプラスチック類が洗えないので、そのままごみ袋に入れて溜まっしまい、ごみに埋もれて生活しているということが現実としてありますので、ほんとにこれから分別を増やすことで問題が

解決できるのかどうかといったところを危惧しています。

○青山副会長 ありがとうございました。それでは次に尾上委員お願いします。

○尾上委員 私の住まいは京都市内にもあるのですが、同じように立ち番のようなものがありまして、報告にもあったように会社を少し遅れていかないといけないなど同じような状況がありますので、どこも同じような感じだなと思って聞いておりました。

舞鶴市の話で申しますと、若い世代のところという都市的に考えるとある意味循環をされていて町としては健康な町であって、高齢者が住んでいるところというのは実は人口がどんどん減少している可能性が高いというわけです。人口が減少しているところの方がごみに関する問題については積極的であって、コミュニティもうまくいっている可能性がある。若い世代のところは町としては健康体の町ではあるが、コミュニティの問題からするともしかしたらごみだけの問題かなと思いついて聞いていたのですが、ごみを除けばごみ以外の部分については、意外とコミュニティがしっかりしていて若い世代でもコミュニティが成立していればそれはそれでOKなんです、ごみの問題をきっかけにコミュニティ自体が今の自治会加入率 90%ぐらいから落ちていくとすると、日々の生活で必ず必要なごみの問題を解決することで、また従来ある舞鶴らしいコミュニティを維持することができるならば、この問題を意識的にコントロールするということはすごく大事な事かなと思って聞いておりました。

○青山副会長 ありがとうございました。私が以前係わった愛知県の半田市というところは、ごみの収集問題で地域の人たちが、役所から言われるのではなくて自分たちで自分たちのことを考えるということで、彼らは自分たちの作っているコミュニティを「ごみニティ」と呼んで、非常にうまくみんなが意識を持ってやっているところがございます。今のご意見非常に重要なポイントだと思いますので、またぜひ今後検討してまいりたいと思います。ありがとうございました。それでは、内海委員どうぞ。

○内海委員 私ども町内は22戸ほどしかないため、立ち番をするにしても年に1回で済みますし、立ち番の順番がきたらしないといけないという意識を皆さん持っておられると思います。たまに取残しとなるごみはありますが、立ち番には皆さん責任を持っておられるので、きちんと分別して出されているか見ていただけますので、そういう意味では戸数が少ないということは良いこともあります。

あと、立ち番の時間についてですが、ほかの地域の方はおそらく7時~8時くらいまでだと思いますが、私どもの地区では仕事の関係もありますし戸数も少ないので7時~7時半とさせてもらっています。ごみ出しもできる限りこの間にお願いしております。皆さんの勤めに支障が出ないようにご協力をお願いしております。

○青山副会長 ありがとうございました。それでは最後になりましたが足立委員お願いします。

○足立委員 私も自分の家のことで言うとりサイクルプラザへ持って行った方が、自分のタイミングで出せるので、時間があるときに持って行っているのが現状です。地域の場所によっても年齢層が違っているのかなとは感じているのですが、町内会ということに対しての意識が以前に比べて無くなってきているのではないかなと思っています。転勤等で住むところが変わってしまうのも原因としてあるのかなとは思いますが。あと同じ町内でも以前から住んでおられる地域と新しい家ばかりの区画の地域があるので、コミュニティが一つになるのが理想的ではあると思いますが現実的にはすごく難しいことなのかなと思っています。

あと、若い世代は子育てや共働きになっていて、朝の時間がすごく忙しい時間帯なのだと思います。自分が子供だったころに比べたら共働きの家庭は圧倒的に増えていると思うので、ごみ出しは朝が出し易いのかということも含めて色々環境が違ってくればもう少し若い方だって関われるのかなと思ったりします。また、地域といっても人口が増えたところもあれば減ったところもある中で、ひとくくりにまとめるのは難しいのではないかなと思います。また、その地域に住んでいるということで地域の中での役割を担うのでしょけれど、なかなかそこを理解しきれていない人が多いのではないかなと感じています。

○青山副会長 ありがとうございます。品田副会長はそのほかございますか。

○品田副会長 そのとおりだなという思いで聞いていたのですが、若い人が立ち番に出にくいということですが、今、足立委員さんが言っておられたように若い人が忙しくなっており働き方が変わってきているのだと思います。私の町内であれば立ち番は6時半~7時半までですが、仕事があるからということで少し早めに帰られたりするケースもあります。事業者も町内の取り組みに対する配慮も考えなければいけないのかなと思いますし、企業も町内も柔軟に対応できるようになれば、若

い人が町内活動に参加しやすくなるのではないかと思います。

岡田地区や池内地区など高齢化が進んでいる割に、社会的な役割に対して意識がしっかりしているのは、それはコミュニティの結束の強さからくるものだと思います。中筋校区や倉梯第二校区、新舞鶴校区、中舞鶴校区なども若い人が多いところですが、若い人が多い地域でも色々な機会を利用してコミュニティとしてのつながりを作る取り組みをしていかないと、やっぱり暮らしにくい町になっていくのではないかと懸念しております。

○青山副会長 ありがとうございます。色々な立場から色々なご意見をいただきました。これから議論をしていく上での重要なポイントになるご意見もあったと思いますが、色々な問題が複層的になっているので、それをちょっと整理して考えないといけないのかなと思いましたが、これは最後のところで整理させていただきたいと思います。

それでは、議題2の自治会長を対象とした「ごみ収集に係るアンケート結果」について事務局から説明をお願いします。

○平野室長 それでは引き続きまして議題2について説明させていただきます。京都府立大学との連携事業を平成26年度からおこなっておりまして、その連携事業の中で平成27年2月に自治会長意見交換会を開催いたしました。本審議会の会長をお世話になっている山川先生に基調講演をしていただき、青山先生にもコーディネートしていただいた会でございます。

その会に先立ちまして、全自治会長に事前アンケートをとらせていただき、そのアンケートの内容についてこの意見交換会で説明をさせていただきました。今回、意見交換会で説明させていただいた内容について再度ご説明させていただきます。

まず、問1の「不燃ごみの収集回数（月1回）について、どのように思われますか」という問いに対しまして、92%の人が「ちょうどよい」を選ばれました。「少ない」というお答えも21人選ばれました。

「少ない」を選ばれた内容を分析しようと思ひまして、スーパー等の店頭回収が増えれば不燃ごみの収集回収はこのままでよいかと尋ねたところ、「思わない」を選ばれ回収回収を増やしてほしいという答えが52%と半分を占めました。

問2の「自治会にある不燃ごみの集積所の数について、どのように思われますか」という問いに対しましては、これも大多数の96%が今の数でよいというお答えでした。その他の少数意見の中には、高齢化が進めば遠くまで出せないの数を増やしてもらう必要があるといったご意見や逆に2か所あるが立ち番も大変なので1か所で良いので

はないかというご意見もございました。また、総合的に考えて単に箇所数ではなくて地域の実情から考えなければならないのではないかといったご意見をいただいております。

問3の「不燃ごみ収集には、自治会での分別指導として立ち番をお願いしておりますが、主に立ち番をされているのはどなたですか」の回答は、全世帯の当番制でされているのが44%。役員のみで対応されているのが47%。シルバー等に委託が3%といった状況でした。その他が19件ありまして、その中身については、高齢者を除く当番制や役員と併用、報酬を出しているところ、有志でやっておられるところなどがありました。

問4の「不燃ごみの収集回数や集積所を増やすと、立ち番の回数など自治会の負担が増えることになりましたが、このことについてどのように思われますか」の問いには、約8割の方々が、負担が増えるので現状のままがよいとの回答でした。その他の19件の中身については、プラスチックについては2回でも良いのではないかと意見やそもそも立ち番自体を考え直さないといけないのではないかとといったご意見などもありました。

問5の「現在の6種9分別は定着したと思われますか」の問いには、66%の人が定着したと回答しておられますが、まだまだどちらとも言えないという方が3割程度おられる結果となりました。その他の内容については、定着しているが分けて出さない人がいるといったモラルの問題やアパートなどの入居者で自治会非加入者には十分に理解されていないといったご意見がございました。

問6の「現在の6種9分別（分け方）でよくわからないこと、よく間違える部分がありましたらご記入ください」という内容については、割愛させていただき、お手元の資料のほうでご確認いただければと思います。

問7の「他の自治体ではペットボトルと他のプラスチック容器を別に収集しているところもあります。また、舞鶴市ではプラスチックの包装類（お菓子の袋やレジ袋など）は可燃ごみとして焼却しており資源化できていません。さらに資源化を進めるには、今よりも分別が細かくなることについてどう思われますか」との問いには、約4割の42%の人が、手間が増えるので困るというお答えでした。資源化のためにはやむを得ないという人は34%でございました。どちらともいえないという人が16%であり、だいたい半々ぐらいの感覚かなという印象でございます。その他の内容でございますが、資源化は大きな課題であり徹底するべきという意見や、ペットボトルは誰もが分かりやすいので分けやすいと思うが、お菓子袋などは難しいのではといった意見もございました。

問 8 の「自治会内に高齢者世帯で、ごみの排出や分別がままならない世帯はありますか」の回答は、「ある」が 3 割、「ない」が 4 割、「わからない」が 2 割となっておりだいたい同じ数字でありました。

問 9 の「ごみの排出や分別が困難な世帯は、どのようにしてごみを排出されていますか」との問いは、親類が 13%、隣近所が 28%、ヘルパーが 6%と先ほどお答えしたとおりです。わからないと未回答がございますので、先ほどのお話でもありましたが、民生委員さんであればもう少し町内の状況を把握されておられますので分からないといった部分が減ったのかもしれませんが、現状としてはまだまだ 3 割くらいで、隣近所で支援していただいているというところをございます。

問 10 の「その他にごみ収集と高齢化の関係で問題を感じますか」の回答は、感じるが 3 割、感じないも 3 割、分からないも 3 割でだいたい同じくらいの数字でございました。その他の内容の中には、集積所に関しましては、集積所までの距離や大きな道路を横断しなければならないなどの道路状況が心配であるとか、ルールに関することでは、高齢化に伴い分別が出来なくなる心配、立ち番に関しては、輪番制とはいえ高齢者世帯の立ち番については不安を感じるといった内容でした。ごみの排出時に関することでは、粗大ごみなど大きなごみを持って行くことに対して不安があること、手助けに関することについては、隣近所の手助けが重要になってくるなどのご意見がありました。将来への不安に関することにつきましては、集積場所の数や回数を増やすことは必要であるが、人員確保が課題であるし費用負担も伴うのではないかといった意見もございました。

問 11 の「これまでに自治会未加入世帯とごみの排出等でトラブルがありましたか」との問いには、ほとんどの方が「ない」との回答でしたが、やはり「ある」との回答も 13%ございました。中身については、市に苦情や相談もあるのですが、自治会未加入で会費も払わないで集積所に出すのはおかしいのではないかといった内容や未加入者は集積箱の使用を禁止しているにもかかわらず使用していた関係でトラブルになったケースもございました。

問 12 の「その他町内でごみ収集に関する相談や苦情等がありますか」の回答は、「ない」が 64%、「ある」が 21%であり、内容については、ごみ集積所の増設や変更、ネットへの補助、カラスの散乱対策、収集日以外の排出や他町内からの持ち込み、取残しごみの対応や立ち番の回数を減らしてほしいなどがありました。報告は以上でございます。

○青山副会長 ありがとうございます。先ほどのアンケートとは少し違って自治

会長さんたちがこんな風に思っていましたよという内容でした。今のアンケート調査というのはごみ問題の全体をとらえるのに非常に役に立つかなと思います。今の説明につきましてなにかご質問がございましたらお聞きしますが、先ほどの議論の中身が先進事例の調査にも関連しますので、次の先進事例の調査の話を終えてから議論をしていただければありがたいなと思います。今の報告に対して何か質問がありましたらどうぞ。

○谷口委員 自治会長さんたちはだいたいどれくらいの年代の方で、男女比はどれくらいなのですか。

○平野室長 きちんとしたデータを今持っておりませんので、感覚的に申し上げますが、退職された方のほうが多いのではないかと思います。26年度の意見交換会の時は、ほとんどが60代くらいの男性というイメージです。

○品田副会長 たまに50代の方もおられますがほとんどが60代・70代の方だと思います。

○青山副会長 意見交換会の時の私の印象では、ごみ問題なのになんでこんなに男性ばかりなのかという印象でした。女性のごみのことをやるということではないのですが、実際にごみのことに接しておられて、常に困っておられる多くは女性のほうだと思っておりますので。男性は仕事を理由に女性に任せてしまう傾向がありますので、そういう意味では誰がごみのことをするのかというのは、これもまた大きな問題であると思うのですが。ちなみに、我が家では私がごみ出しをしております。他に何かご質問やご意見はございますか。

それでは、今の議論については後で議論したいと思いますので、議題3のごみ収集に関する他市の取り組みについて報告をお願いします。

○平野室長 議題3につきましても、議題1と同様に京都府立大学のほうに報告をお願いしたいと思います。今年度の研究事業として他市の取り組みについて調査研究していただいておりますので、よろしく願いいたします。

○勝山准教授 それでは、引き続き説明させていただきます。まず、ごみ収集についての他市の取り組み状況についてですが、調査を実施するにあたって立ち番制度というものが他の市町村でどれくらいやっているのかということをお調べさせていただきました。京都府下でありますと、向

日市、長岡京市、南丹市、綾部市、舞鶴市の5市ということになっております。ただ、舞鶴市は地域の皆さんでお世話になっておりますが、他の4市につきましては、例えば長岡京市はシルバー人材センターに委託をしています。ですから、実際に地域の人が立ち番をしているというのではないということです。一概に立ち番が全て舞鶴市と同じケースかというところではないことが分かってきました。舞鶴市以外は基本委託料とか謝金での支払いをしているので、仕事のひとつとして立ち番をしているという状況ですので、そういう中で舞鶴市はどうしていくのかというところを研究していきたいというところが研究のスタートとなっております。

まず、立ち番の議論をさせていただく前に、そもそもなぜ立ち番をするのかというところを振り返りまして、分別することによってごみを資源化していくということが非常に大事なことであるというところからスタートしております。

実は全国でゼロウェイストという取り組みをしている市町村が増えてきております。その代表でありますのが徳島県上勝町です。葉っぱビジネスで有名になった上勝町です。上勝町は葉っぱビジネスやゼロウェイストの取り組みそのものを通じて、視察を受け入れたり実際にインターンシップを受け入れたりして、地域に若い人たちを巻き込んで取り組んでおられます。それ以外にもゼロウェイスト宣言ということで、福岡県大木町や熊本県水俣市が宣言をしております。ウェイストというのは「無駄、浪費、ごみ」を意味しており、それをゼロにしよう無くしていこうという取り組みを宣言している市町であります。それ以外に、宣言をしていないものの、実際にゼロウェイスト的な取り組みを行っているのが神奈川県逗子市や神奈川県葉山町、奈良県斑鳩町です。

ゼロウェイストはオーストラリアが発祥で、ごみ減量化政策として世界各地でこのゼロウェイストの取り組みが行われております。元々は処理施設を造る費用があるならそれをソフト事業、例えばごみを出さないというような取り組みを自分たちですることによって、施設そのものがいらなくなるのではないかという発想で展開されていることが特徴であり、共通しているのが「地域主導」であるということです。そして「低コスト」「環境負荷が低い」「最新技術に頼らない」という考えのもと、非常に地道な活動の中で、地域の方たちがごみを減らしていくにはどうすればよいのかということを考えて行動されておられます。

ゼロウェイスト宣言をしている上勝町は、平成15年にゼロウェイスト宣言をされており、その中でも2020年にごみの焼却と埋め立て処分を無くすということを掲げて取り組んでおられます。現在リサイ

クル率は79.3%ということで、全国的にもトップレベルの取り組みです。

上勝町の特徴ですが、まず地球を汚さない人づくりに努めますということで、人が向上することによってごみが資源化されるという考え方のもと取り組んでおられます。上勝町内にはごみステーションが1か所しかなく、町内の処理施設を運営しているのは、ゼロウェイストアカデミーというNPO法人です。それまでは、ごみを野焼きしていた地域があったのですが、リサイクル法が出来た関係で分別をしなければならなくなりました。しかし、分別した残りのごみをどうするかということで、焼却施設を造ったのですが、その施設からダイオキシンが発生してしまい施設が使用できなくなりました。焼却施設が使えない中で、ごみを無くそうという動きからこういう処理の方法になったというわけです。

その特徴として、町の中には収集車が一台も走っておりません。皆さんが自分たちでステーションに持ってくるという形になっているということがひとつ大事なところでございます。それから、現在45分類の分別で、細かくすればするほど大変ではないかと思うのですが、ごみをどの分類で捨てればよいのかということ突き詰めていくと、どんどん細かくなっていったのです。例えば堅い紙を資源として処理しようとするすると細かく砕いて処理する必要があるのですが、当時は資源化の処理ができなかったので古紙として分別がすることができなかったようです。しかし、それが古紙として処理できるようになったので資源ごみとして分別を増やしていったという経過で、今では45分別までであるということです。

もうひとつの特徴は、ごみの半分くらいを占める生ごみを各家庭で処分をしているということです。ほぼ100%の家庭で導入しているという取り組みなのですが、生ごみを自分たちの家でたい肥化して、畑に返すということで100%リサイクルされています。そして、自分たちで処分できないごみだけをごみステーションに持ち込んでいるということです。私も行って驚いたのですが、ごみステーションということでしたから、きっとすごい匂いがするのだろうと思っていたのですが、生ごみが無いせいで一切匂いがしません。

ステーション内での取り組みとして、分別品目毎に、例えばアルミ缶の場合だと1キロ105円と書いてありまして、この数字は売却額が書かれているのです。また、下の段にはこのごみがどういう風に処理されるのかということが明記されているため、自分たちが出したごみがどのように処理されて有効活用されているのかが分かるようになっているので、ごみの分別自体が増えても皆さん負担に感じないというところだと思います。

実際に町で使われているごみ処理経費は年間で約 570 万円です。そのうち 61%が焼却処分ということで、未だに他地域で処理をしているようですが、資源ごみの売却代金は約 250 万円あるという状況ですので、差し引き 300 万円ほどでごみ処理ができているというひとつの取り組み事例としてご理解いただければと思います。

次は雑紙の取り組みについてですが、これは舞鶴市でも事業所によっては取り組んでおられるかもしれませんが、ポイントカードで持ち込まれた雑紙の重量によって、一定ポイントが貯まれば商品と交換できるという仕組みや抽選のような仕組みで、いわゆるゲーム感覚でごみが減らしていけるという取り組みをされておられます。

生ごみ処理機についてですが、これは 3 パターンありまして、コンポストと電動生ごみ処理機とバクテリア de キエーロを紹介します。コンポストはご存じのとおり簡単なたい肥化容器ですし、電動生ごみ処理機は 5 万円ほどするのですが、自己負担が 1 万円で済むように町が残りを負担していることで、ほぼ 100%の保有率を達成している状況です。次にバクテリア de キエーロというのがあるのですが、これは葉山町で比較的取り組んでおられるもので、たい肥化は畑があれば自分たちで使うこともできるのですが、葉山町は畑がないので、このバクテリア de キエーロに土を入れてそこに生ごみを混ぜることによって生ごみを減らす装置です。生ごみは、ほぼ水分なので容量が増えずにこの中で生ごみが無くなっていくという比較的簡単な装置であり、葉山町では 1,000 円で購入することができることから、生ごみそのものを減らしていくという取り組みとして、モニターを含めて約 6,000 個出ているという状況です。各市町村のごみを出さない取り組み事例としてご紹介させていただきました。

もうひとつご紹介するのが、地域で集められる古紙や古布などについてですが、古紙や古布は雨に濡れるとよくないので、神戸市では土日でも開設するような常設の保管庫を町内で設置するような場合に、上限 20 万円まで助成するという制度があり、プレハブのような倉庫を自治会で設置することを促しているケースもあります。そのほか、京都市では、ごみの種類と回収場所が示してある資源物回収マップを作製して利用者に対して周知を図っているケースもあります。

ここからが、発表の本題のところになってくるのですが、ゼロウェイストということでごみを減らしていく取り組みも大事なことです。ありますが、やはり立ち番というものが、他の市町村においてもほとんど実施していないという現状の中で、廃止することがどうかという問題があるかと思います。それを解消する方法がないかということで、立ち番廃止で検索したところ唯一見つかったところをご紹介したいと思います。

その前に、「地域運営組織」という言葉をご存じない方も多いのではないかと思いますのですが、国が国家戦略として進めている地方創生の取り組みのひとつとしてやっているものです。各地域の自治会などの組織を一つにくくって地域の課題解決的な取り組みをしていこうということで、おおむね小学校区で色々な地域の課題そのもの、例えばごみ問題をどうしていくのか、高齢者の見守りをどうしていくのかということに取り組んでいく色々な機能を有した組織です。様々な方が係わっておられる自治活動ということで小規模多機能自治という表現があるのですが、そういった取り組みをされている事例があります。

先ほど出てきました地域運営組織ですが、地縁型の自治会や町内会という組織をベースとしながら、目的型の消防団や交通安全・文化サークルなど、そして属性的な組織としてPTA、子供会、女性会、高齢者クラブなどそういったものが一体となっています。また、組織単位が小学校区域なので自治会も広範囲になるためスケールメリットが生かせる課題解決型組織になっています。それから、総合力ということで、一人一人が中心になるので、自治会でしたら大抵が世帯主の方が代表的な形で取り組んでおられますが、若い人たちも参加できるような仕組みができるということが特徴になります。場合によっては、行政の一部機能を担うことも出てきおりまして、後で紹介するところもそうですが、そういったことをするためには地域でスタッフを雇用しあおうという動きになってきております。こういった地域運営組織は、全国で1,700ほどあるのですが、地方創生の戦略で行きますと5年間で3,000まで増やそうという取り組みになっております。

京都府内でも、京丹後市や福知山市の三和など色々なところでこういった組織ができつつあるということでご紹介させていただきます。

先ほどもありました一人一人ということで、こういった団体の中に自治会の中に入っていない人も参加してもいいよという仕組みになっていることがひとつポイントじゃないかということでご紹介させていただきました。

その事例のひとつとして鳥取県南部町にある東西町地域振興協議会に取材に行かせていただきました。約50年前に東西町ができたのですが、地域運営組織である地域振興協議会は平成19年に設置しております。これはなぜかというと、南部町も平成の大合併で周辺の市町とくっついてできた経過があり、行政に住民の声が届きにくいという声があるなかでもう一度自治の在り方そのものを変えていこうということで、こういった取り組みがなされております。

先ほどの地域運営組織というものは、鳥取県や島根県などが全国よりも10年以上も高齢化が進んでいるという現状があるなかで、そういった地域をどうしていくのかコミュニティを維持していくにはど

うしていくのかということを考えてつくられた制度であるということです。

東西町は人口が約1,200人、世帯数が約470世帯で高齢化率32%であり、高齢化の波にどうするかということに取り組んでおられます。協議会の組織を見てみますと、実はこの組織には市町村から補助金が支出されており、行政の一部機能をこの組織が担っている仕組みになっています。町づくり部、人づくり部、福祉部、広報部という形で高齢者の見守り活動であるとか災害時の防災灯の設置などの取り組みなどをされておられまして、大臣表彰などの表彰を受けておられる組織です。

東西町は、南部町の中でも比較的熱心なコミュニティがありますので、いろんな施策をやる上でのモデル地域としての機能を果たしており、資源ごみについても他の地域のところではやっていないが自分のところだけで率先して分別に取り組んでおられる地域でございます。

先ほどの上勝町であったようにエコポイントを活用して、自分たちで積極的に資源回収や集団回収をして資源ごみを売却し、地域の収入源とすることで組織を成り立たせるということを一つの機能としてやってこられています。

ごみの分別についてですが、南部町が作っている分別表ではなかなか分からないということで、自分たちで工夫して独自のものを作っておられたのが評判になって最終的には南部町の手引きのモデルにもなっています。立ち番についても、自分たちで立ち番をしようという、舞鶴市と同じような取り組みとしてスタートしておりまして、冬場は積雪が多く非常に立ち番が大変なところがございます。そんな中で、立ち番の最中に倒れられた方がおられ、このまま立ち番を続けていくのは良くないのではないかといった声があがり、廃止するための議論を重ねてこられました。そして、立ち番を無くすモデル事業を4区町内で始められ、そこでは立ち番がつかない代わりに、ごみ袋に地番かもしくは名前を記入することで、後で不適正な排出があった場合に指導ができるようにしようというようなやり方を決められました。立ち番の代わりとして、ごみの分別に詳しい方をクリーンサポーターとして有償で配置されました。

現在は、この制度がうまく機能し始めているので、あと1区ができれば全地域で廃止ができるということころまできているようです。しかし、当初は無記名のごみが出たり粗大ごみが出されたりするケースがあり、未記入の場合は回覧板や広報で周知をするなどで適正排出に取り組まれました。また、こういった不適正排出について、なぜ出るのかということを検証する必要があるということで、環境美化カメラも設置されました。カメラの設置については、会長さんも抵抗があっ

たようですが、地域外の人が持ち込まないようにアピールするための対策として設置に踏み切ったということです。

こういった対策をした結果、おおむね立ち番廃止が軌道に乗ってきたということになり、これで立ち番を廃止してもこのまま続けられるだろうということで、年度明けくらいに全地区で立ち番を廃止するという動きになっているようです。

しかし、立ち番を廃止できたとしても、高齢者のごみは出ますので、その対応をどうするのかということをご紹介させていただきます。

上勝町の話になりますが、一般廃棄物運搬支援事業ということで、持ち込みが出来ない人に対してNPO法人が奇数月に支援をする制度があります。赤磐市というところは、シルバー人材センターにワンコインで依頼する形をとっております。もうひとつ、行政側が支援するというので、これは要介護等の限定ではありますが、ごみ出しの戸別収集サービスなどがあります。

高齢者の範囲をどこまで認める必要があるのかというのを図で整理をさせていただきました。

介護保険制度や障害者総合支援法に基づく制度のほかに高齢者を配慮している制度の中で出てまいりますのが、避難行動要支援者で例えば市の生活支援を受けているような難病患者（障害者総合支援法に基づく障害福祉サービスの対象ではない）がおられるケースや自治会が支援を必要と認めるケースなどがあります。高齢者・障害者といっても範囲はとても広いので、こういった制度を導入する場合は、行政は税金を支出するわけですから一定の制度基準に該当しないと対象にしないということになります。

ただ、先ほどお話しした地域運営組織がやっているケースで、高齢者・障害者で困っているということであれば広く支援をするケースもあるので、その実施者によっても範囲が違ってくることがあるかと思えます。今後議論するうえでは、対象とする高齢者等の範囲をきちんと議論していく必要があるのではないかとということをご提示させていただきます。

最後になりますが、ごみを出さないということで取り組んでいきますとリデュース・リユースを率先してやっていく必要があると思えます。京都市では色々なイベントで再利用できるリユース食器を提供しています。祇園祭りなどの屋台の食器もリユース食器を使用してごみの減量をしています。その他に、京都市内の役所前では月1, 2回、NPOがフリーマーケットを実施しています。

それ以外にも、こちらは特殊かと思えますが、浦安市では個人の不用品の売買を市が仲介する常設のフリーマーケットをリサイクルプ

ラザのような施設で実施しておられます。

また、上勝町でもリデュース・リユースを実施しておりまして、介護予防活動センターがNPOの事務局を兼ねているのですが、その横に地域で出てきた古着などを活用して商品を作って販売するという活動です。もうひとつが「くるくるショップ」でございまして、ごみステーションの奥にあるのですが、無人の施設で町民が不要になったものを置いて帰れる場所となっています。ただ、原則として持ってきたもの以上のものを持って帰るというルールになっているようです。このように地域の中でごみと思われていたものを資源物として循環させるということに取り組んでおられます。毎月260キロぐらいの資源が循環しているとのことでした。また、上勝町でもリユース食器を利用されておられまして、夏祭りなど全てこの食器を利用されているということで、ごみが出ない取り組みをされていますのでご紹介させていただきます。

長くなりましたが、以上で事例紹介を終わらせていただきます。

○青山副会長 ありがとうございました。本当は今の報告を先ほどの議論の前にしておけばさらに活発な議論になったかと思いますが、今のご説明に関して何かご質問等ありますでしょうか。

○田中委員 上勝町はもともと葉っぱビジネスで成功したあとに、ごみの取り組みでも成功したのですか。

○勝山准教授 時期的には葉っぱビジネスが先だったと思いますが、特徴的なのは役場で全てをやるのではなくて、葉っぱビジネスが大きくなったら「株式会社いろどり」という第3セクターを作ったり、ごみ問題はNPOを作ったりしてNPO等が主体で動けるように業務を委託するという形で、町の仕事が地域に下りていくという仕組みになっております。それが好循環に回っているという事例で非常に取り組みとしては面白いのではないのでしょうか。

○田中委員 そんなに成功している町というのは誰がブレインなのですか。
この審議会がそういう役目を負うとなると相当本腰を入れて頑張らないといけないかなと感じております。

○青山副会長 審議会がそういう役目を負うとなれば相当本腰を入れて頑張らないといけないのですが、上勝町の場合はもともと農協の職員が非常に頑張っていてやっていたと思います。それをやり始めて町民の皆さん一人一人がそのビジネスをやることだけでなく、先の岡田地区の話ではな

いですが、自分たちがやらずしてどうするんだという意識改革をした結果なんでしょうね。

○田中委員

私も意識改革という点で、第1回審議会のあとにごみを減らすということを自分に置き換えてダイエットをしてみまして。その結果、体が軽くなったり、目覚めが良くなったり、思考回路が良くなったり、昔の服が着られるようになったり、ごみを出さない生活を心がけるようになったり、食品ロスが減ったりなど良いことばかりでした。そう分かったからこそ、舞鶴市の皆さんにごみを減らすということが良いことだということを伝える方法がものすごく重要な気がします。ここまで成功事例を出されるとできる自治体があるというのは事実なので、舞鶴でもできないわけじゃないですけど、自覚が芽生えるためにはどうすればいいのかなということ、ごみのために何ができるのかということについて、市民が本気で考えるきっかけ作りが必要ではないかと思います。

先ほどから成功事例ばかりを見せていただいたので、審議会として頑張らなきゃいけないなと思っています。

○青山副会長

舞鶴市民として、例えば広報のためのシンポジウムをやった時に是非出席していただき、こんな良いことがいっぱいあるというような話をしていただくのがいいんじゃないかと感じております。これはちょっと後でまとめの中に入れようとは思っていたのですが、今日は色々ご意見が出たと思いますが、先ほどのスライドで紹介した上勝町の人たちの覚悟ですね。ごみを出さないという覚悟、それをやるためには人の意識を変えないとだめだということがありましたが、今おっしゃられたように市全体のひとつの大きなキャンペーンとしてやらないとなかなか定着しないだろうという気がします。

国レベルでいえば、二酸化炭素を削減しようという京都議定書が1997年に採択された後、物凄い勢いでマスコミも色々なことをやって、みんな二酸化炭素を削減しよう、二酸化炭素を減らすためには何でもしようというように皆が動き出しましたよね。逆に、それで洗脳されすぎていて少し違うようなことまで二酸化炭素と結び付けているところもありましたが。

しかし、ごみというものについては、皆さん身近なところでたくさん持っているわけですから、その中で真剣に一人一人が認識を持って考えるということはずごく重要なことだと思います。そのためにも、本審議会のひとつの答申の中に是非そういう中身を盛り込んで、市としてこれはしっかりやれよという激励をしないといけないかなと思います。

審議会が主体になって実際に何かするというのではなくて、審議会は、皆さん方のご意見を整理して、これをぜひやりましょうということを答申として出すところがございますので、ぜひこれを答申に盛り込んでほしいというものはずっと持っていていただいて、最後の答申案に入っていないければ入っていないということを言っていただければと思います。

○尾上委員 先ほどの事例紹介のところで面白いなと思ったのが、施設整備を考えようというのがあるって、その時にお金もったいないという感覚が、上勝町全体にうまく響いた結果なのかなと思いました。舞鶴市でも、予算がないから頑張りましょうというのは変ですが、しかし、舞鶴市を運営していく上で、ごみ処理をするにはこれくらいの費用がかかるから市民もこれくらいの参加をしないとイケないのだということを分かりやすい説明というか、何か施設整備をするよりもこっちの方がいいじゃないかという説明はすごく分かりやすく聞きましたので、舞鶴市でもそういうやり方があったら面白いなと思いました。

○青山副会長 何かいいキャッチフレーズのようなものですかね。

○尾上委員 そうですね。それをやるならこっちをやろうよみたいなものですね。

○青山副会長 キャッチフレーズとキャンペーンのようなものをうまく組み合わせると、施設を作るよりさらに良いものができるかもしれませんね。

○尾上委員 逆に言うと、舞鶴市はまだできてしまうから市民にそこまで強く訴えられないのかなとも思います。

○平野室長 子供たちへの出前講座では、ごみ処理にこれだけお金がかかっているんで、みんなでごみを減らしたらごみ処理費用がどれくらい減って、余ったお金で学校などを綺麗にすることができるんだよといったお話はさせていただいています。

○足立委員 地域運営組織という話がありましたが、舞鶴市の中に自治体を越えた大きな枠組みで取り組みをされているところはあるのですか。

○勝山准教授 舞鶴市ではまだありません。ごみ問題だけではなくて高齢者などの地域福祉ということを考えていきますと、そういったことをこれからそれぞれの地域で持つ必要があるのではないかという議論がスター

トしていると思います。それを私どもも地域自治や住民自治という視点で研究しておりますので、できることならそういうことも引き続き研究していきたいと考えております。

○青山副会長 島根県雲南市にはいくつもの協議会がありまして、競い合うような形でいろんなアイデアを出し合って自分たちのコミュニティの事業を実施しており、ごみ問題や高齢者のサポートも含めてやっておられます。今までは、役所が高齢者の問題は担当課が市全域で対応していくという流れでしたが、色々なお金を束ねて地域にお金を下ろして、地域はそれを受けて、自分たちに必要なことをやっていくという仕組みになっているようです。今、舞鶴市では具体的な仕組みはありませんが、今後、そういったことも考えていくという動きが日本の各地にあります。そのあたりも含めてまた必要があれば事例紹介をいたしますが、こういったことが動きがあるということをご認識していただければと思います。

他に何かご質問等ありませんか。

(意見なし)

はい、ありがとうございました。

それでは、簡単にまとめさせていただきますと、一つ目に分別の問題がありました。リサイクルシステムやごみを分けてどれを資源として使っていくのかといった一種のテクニカルな部分についてどうしていくのかという話がありました。前回の審議会で視察に参加していただいた皆さんには、実際にリサイクルプラザの中でプラスチック容器類とペットボトルを分別している現場をご覧になっていただきましたが、例えばああいうのを分けていく、自治会のアンケートでは分別が細くなるのは手間だからダメだという意見もありましたが、そういったリサイクルそのものの問題ですね。

それから立ち番の問題ですね。立ち番の問題について考えていくことは非常に重要で、冷静に考えれば平成 10 年から始まった制度であり、それまでは分別の仕方がそれほど厳しくなかったのも、立ち番の必要性が無かったのかもしれませんが、何か違う仕組みを考えていく、あるいは先ほどの事例のように何か新しいシステムで立ち番の制度を今後どう見直していくのかということが考えられます。これは高齢化の問題と併せて考えていかなければいけないのですが、これが二つ目です。

三つ目は排出困難者の問題です。排出困難者の人々をどのようにサポートして支援するのかということについては、これもきちんと考え

ないといけない問題でありますし、立ち番の話とも少し絡みますがそれとは別に様々な事情における排出困難、例えば若いお母さんが小さいお子さんを何人も育てている状況が排出困難という場合もありうるわけですので、そういった事柄は当然重要な問題として考えていかなければならないと思います。

四つ目が、先ほどの人材育成といいますかコミュニティといいますか、舞鶴というコミュニティ全体の中でもう少し細かく分けて考えていく必要があるのかもしれませんが。コミュニティを一体どうしていくのか、皆さんの認識をどう高めていくのかをこれから真剣に取り組まない、単にシステムだけ作って動くかと言ったらそういうわけにはいかないと思いますので、そのあたりも何らかの仕組みと具体的に住民の皆さんに知っていただくような仕掛けを考えていかないといけないと思うわけです。

皆様のご意見を聞いていて大きくはこんなご意見等々があったなという感じがしております。まだまだ課題は多くあると思いますが、非常に皆さんの生々しい声を聞かせていただきましたし、アンケートの結果も出していただきましたので、こういったことも踏まえて次回の会議以降で議論させていただければと思います。

以上で、本日の会議を終わらせていただきます。長時間ありがとうございました。

それでは、事務局の方から何か報告事項があればお願いいたします。

○田中主幹

ありがとうございました。それでは、事務局より今後の日程について説明させていただきます。

今後の審議会の予定でございますが、次回は市から審議会に諮問をさせていただく予定にしております。当初は年度末としておりましたが、4月に開催させていただきたいと考えております。新年度当初で、皆様大変お忙しい時期とは存じますが、よろしくお願ひします。

それでは、閉会にあたりまして、飯尾市民文化環境部長が閉会のあいさつをいたします。

○飯尾部長

本日は大変熱い議論を交わしていただき誠にありがとうございました。委員の皆様方におかれましては、10月の第1回審議会で、ごみ処理状況や計画をお聞きいただき、先月には廃棄物処理施設の視察、そして本日、アンケート結果を中心に市民の皆さんの意識について把握いただきました。おおまかな舞鶴市におけるごみ処理状況や課題について一定のご理解をいただけたものと存じております。

次回は私どものほうから基本計画に示す具体的施策について諮問をさせていただきます。本日のような熱い議論を重ねていただきまし

て、答申をいただきましたらしっかり守ってまいりたいと思いますので、新年度大変お忙しい中ではありますが、ご参加いただきますようよろしくお願い申しあげまして、閉会のご挨拶とさせていただきます。

○田中主幹 それでは、以上をもちまして、本日の舞鶴市廃棄物減量等推進審議会を終了とさせていただきます。
 本日は、お忙しいところ、誠にありがとうございました。

午後 3 時 35 分 閉会